

麦の穂

第60号

2017年2月
特定非営利活動法人

麦の会

TEL&FAX

022-299-1279

〒983-0834 仙台市宮城野区松岡町 17-1

郵便振替口座 02200-8-46178

E-mail : muginokai@k5.dion.ne.jp

http://www.muginokai-koppe.com

目次	相模原事件報道に接して	猪俣 暁子	・・・ 1p
	NPO 留学 派遣報告	佐藤 文俊	・・・ 5p
	新人	阿部 央希	・・・ 8p
	杜の都仙台のアンテナショップ「エフブンノイチ」		・・・ 9p
	新聞記事より「田んぼカフェソレイユオープン！」		・・・ 12p

相模原事件報道に接して

猪俣暁子

はじめてこの事件を知った時には、まだ“特異な人物の引き起こした特別の事件”という思いもあった。しかしほどなくそんなことではないと気づかせられた。状況が明らかになるにつれ、特にネット上、加害者の言動への共感が書き込まれていると知った時には、何か底知れない怖ろしさでいっぱいになった。私たちの生きるこの社会の中にふだんは身を潜めているものが、突如表舞台に姿を現したのではないかという思いであった。

この凍りつくような状況のなかで、不安に怯える当事者の声に応えて、ある当事者と親の会から事件の翌日にメッセージが発信された。「障害のある人もない人も、私たちは一人ひとりが大切な存在。私たちはみなさんを全力で守りますから、今まで通りに安心して堂々と生きて」という内容であった。このメッセージに、かろうじて救われる思いだった方は少なくないのでは、と感じた。

その後の様々な報道に接しながら考えさせられたことをいくつか述べてみたい。

1) 「匿名報道」ということ

神奈川県警は、いち早く亡くなられた方々を匿名にすると発表した。それは「知的障害者施設の特徴から本人や家族のプライバシー保護の必要性が高く、すべての遺族からの強い希望である」という。

亡くなられた19名の方々とそのご遺族が、そういう風にひとくりにされ見えなくされてしまうことへの大きな疑問とともに、早々と“すべての遺族の強い希望”と断定されたことに、何か強引な幕引きをされたような違和感を覚えた。周囲の偏見や差別に深く傷ついたり、複雑な家族の状況を抱えている等、匿名にせざるを得ない方々がおられるという現実はあるとしても、それが19名のご遺族すべてなのかとの疑問は消えない。

「匿名報道」をめぐる様々な発言のなかで、ある方の「そうせざるを得ないような社会をつくりだしてしまった自らを恥じる。」という言葉があり、私はハッとさせられた。

ある障害当事者の方は「私たちは亡くなった後も差別されるのかと感じた」と発言されていた。その言葉に、私はずいぶん前に観た「風の舞」というあるハンセン病療養所の日常を映した映画のことを思い出した。「らい予防法」という誤った法律の下、ハンセン病療養所内に終生隔離を余儀なくされた方々の多くは園内で本名を伏せて偽名を使い、亡くなくても故郷の墓に入ることを許されず、園内の納骨堂には今も多くのご遺骨が納められている。その骨壺にすら本名を書くことのできない方々がたくさんおられるということ、私はこの映画で初めて知った。生きていた間も亡くなってからも、自分の名前を名乗れないということは、その人がこの世に存在したことすら否定することではないかと、大きな衝撃を受けたことを思い出す。

今回被害を受けた方々には永い時間を共にされた大切なご家族、施設で一緒だった友人や職員の方々がおられる。そうした関係者の衝撃の深さは計り知れず、今は何も言えないと言われるのもその通りだと思う。どれだけ時間が経っても、語れる時が来たら、お一人お一人の生きた姿を是非伝えていただきたいと思う。そのことによって私たちは亡くなられた方々の生きた証としてそれを大切に受けとめ、お一人お一人の死を心から悼むことができるのではないだろうか。

2) 「施設から地域へ」ということ

報道によると、「津久井やまゆり園」は「平和で温かい園、安心して預けられる」と家族から信頼され、園側も開設以来積極的に地域の人たちを採用するなど、地元とのつながりを大切にしてきたという。他方、取材に訪れた報道関係者の多くは、なぜこのような交通の便が悪い「人里離れたところ」に巨大施設があるのかと疑問に感じたという。

この20年余り、「施設から地域へ」という方向に大きく動いていることは、身近にも実感でき、とても心強いことである。しかし、身の回りの様々な資源を利用して地域で生活する障害をもつ方々が増える一方で、障害の重い方や地域生活を支える様々なサポートを得るのが困難な方々の多くは遠くの大きな施設を頼らざるを得ないという、二つの方向に分かれてしまうのが現実ではないかと思う。このままでは高齢化の進行に伴って、ますますそうした施設のニーズは高まり、それに呼応するように巨大施設が造られていくのではないかと危惧される。

宮城県においても、前浅野知事の時代に「施設解体宣言」が出され、その方向に動きはじめたかに見えたが、現知事に代わってコロニー解体は撤回され、大和町の船形コロニーは300名定員のさらに大きな入所施設として、2023年度の完成をめざし改築・整備する計画であるという。本来、日常生活に多くのサポートを必要とする人ほど、人の集まりやすい便利な街中の生活が望ましいはずなのに、それに逆行する流れを、どうしたら変えていくことができるのだろうか。

3) 「優性思想」をめぐって

ある脳性麻痺の方が「障害者はいない方がいいという考えはこの世の中に溢れていて、今回の事件と根っこは共通だと思う」と発言している。

「らい予防法」も「優生保護法」も、わずか20年前までこの国に存在していたのである。

数年前に始まった「新出生前診断」では、すでに異常と診断を受けた胎児のほとんどが中絶されているという現実がある。障害のある子が生まれることをおそれるという風潮がひそかにこの社会に蔓延していることをひしひしと感ずる。何十年も前のことで記憶が定かではないが、ある遺伝相談の講習会で中央から派遣された講師が、遺伝相談事業にかかる経費と遺伝性の病気で障害を持つ子が生まれたときに、その一生にかかるお金をてんびんにかけて、この事業がいかにこの国にとって有用であるかと説いていた。何のためらいもなくそう言い切る言葉に耳を疑い、その異様さ、おぞましさに打ちのめされる思いだったことを思い出す。でも、その場でそれを口にすることはできなかった。しかし今では社会全体がそうした価値観に徐々に蝕まれ、障害を持つ人のみならず、多くの人にとって生きづらい状況をつくりだしている。

最近特に気になるのは、原発事故の影響を考えるなかで、異常のある子どもが生まれるのではないかという不安の声である。イラク支援活動を続けておられる高遠菜穂子さんのあるエッセイを紹介したい。数年前、郡山市の母

親たちの集まりでイラクの子どもたちの健康被害について話したとき、ある女性が「震災後、夫と相談して子どもはつくらないと決めたんです」と打ち明けた。それに対し「無責任かもしれないけど、産んでほしいと思う。一緒にいのちを祝いたい」と高遠さんは伝えたという。後日、その女性から「子どもを持つと決めました」というメールが届き、ほどなく妊娠の知らせもあったという。「優性思想を助長するような脱原発運動は絶対あってはならない」という高遠さんの言葉が心に強く響いたことを思い出す。

「優性思想」をめぐる発言のなかで、“自らを問う”ことに触れる何人かの発言があった。雨宮処凛さんの「自分の中にも弱い人に対する差別の芽があると自覚する」ということばを、私は自分に向けられたものと受けとめたいと思った。以前仙台で講演された千葉の山田晴子さんの「私たちの誰もが、差別する側にも差別される側にも立ちうる。そのことに気づくことで、お互いにそこから解放される」ということばも、ずっと心に残っている。ハンセン病市民学会で出会った内田博文さんの「差別する側は、学ばなければ自分が差別していることに気づくことができない」ということばを私は折に触れ心の中で反芻している。

4) 「切れ目なく、一緒に生きる」こと

誰もがありのままの姿で、あたり前に生き合える社会をつくるためには、と考えると、私たちの活動がめざしてきたこと、そのものであることに行き着く。ものごころついた時にはすでに周りには障害のある人や肌の色・ことば・風俗習慣などの異なるさまざまな人たちがいて、それがあたり前の日常であるような中で育ち、乳幼児期の保育教育の場・学校生活・そして社会人としての生活へと、切れ目なく分けられることなく一緒に育ち一緒に生きることが何より大切なことであると改めて思う。

「共育を考える会」が誕生して30年、発足当初の熱気あふれる活気に満ちたあの頃を思い返すと、先細り一方のように見える現状に、もう幕を下す時が来たのではないかと勝手に何度も考えた。しかし今回ほど“やめてはいけない”と思わせられたことはない。

どんなに細々とでも続けていきましょう。

努めて声を出し、顔を出し、名前を出して発信していきませんか。

共育を考える会会報「このゆびとまれ」249号より転載

NPO 留学 派遣体験報告書

平成 29 年 1 月 25 日

まちづくり政策局情報政策課

佐藤 文俊

パンとクッキーの店 コッペ

- コッペは、障害を持つ人も持たない人も一緒に働ける場として、1988 年に始まりました。運営団体「麦の会」は 97 年に設立され、2000 年 3 月に NPO 法人の認証を取得。07 年 4 月より就労継続支援 B 型の事業を行っています。
- 小麦やバターなどの材料は、添加物や農薬を使用しない国産品を選んで使用しています。効率を最優先する考え方は障害者差別に結びつきかねないという危惧からです。
- 安心して美味しいパン・クッキーを製造していますが、営業スタッフがおらず、販路の拡大が課題です。区役所やイベント会場などの販売会で見かけたら、ぜひ買って食べてみてください。



活動内容

- 研修の全日程、コッペの工房で、スタッフ、障害メンバーとともにパン・クッキーの製造作業に従事しました。生地をこねたり鉄板に並べたりのほか、清掃・洗浄作業、得意先への配達もありました。



- 皆がその能力や適性に応じて、とてもまじめに、そして和気あいあいと働いていました。数日働くと、障害の有る無しだけでなく、「市職員と市民」という垣根もなくなっていく気がしました。
- 「誰もが一緒に働ける職場」というものは、私のような研修生にも居心地がよく、業態が違ってもはいえ市役所内の職場環境づくりにおいても学ぶところがあると思いました。

協働を進めるには

コッペの創業から 30 年近く経ち、その間、NPO 法人の認証制度ができたり、障害者総合支援法の給付事業となったり、周囲の制度は様々に整備されてきました。コッペはそれらにうまく適応して少しずつ着実に前進しており、理想的な協働が実現していると感じます。

それは、コッペが「障害のある人もない人も一緒に働ける場を」という設立理念を揺らぐことも薄まることもなく維持し、また行政がそれを歪めてしまうようなこともなかったからだと思います。

行政がお仕着せで何かをやらう・やらせようとしたりしても、きっと長続きせず、協働はうまくいきません。行政側は市民の意思や活動理念を尊重し、必要な環境整備や支援に徹していくことが、協働の推進にとって大切であると感じました。



無題

佐藤 文俊

昨年 11 月と 12 月に市役所からの研修生として 5 日間コッペで働かせていただきました佐藤文俊です。その節は皆さんお世話になりました。この度、飯島さんから「テーマも長さも自由です」というフリーダムなオーダーを受け、麦の穂に寄稿することになりました。仕事柄あんまり自由なのには慣れていないので何を書いたらいいのか考え込みましたが、最近のニュースから一つ書くことにします。

この号が出る頃にはいささか旧聞に属する話になりますが、1 月の半ばに日本列島に強い寒気が流れ込み、全国的に大雪になりました。仙台もまあまあ積雪がありましたね。そしてこの雪とタイミング合わせるようにして、1 月 14 日、15 日に大学入試センター試験が行われました。センター試験は一発勝負です。受験生にとって絶対に遅刻の許されない日に渋滞や交通機関の乱れのリスクが高まり、沢山の人が気が気でない思いをしたことでしょう。

さてセンター試験前日の夜、テレビのニュースで試験前日の受験生たちの姿を特集していました。その中で一軒のお宅を訪問していたのですが、そこのお母さんは息子のために、雪用のシューズカバー、足に貼るカイロ、エナジーバー（携行食）、下痢止めの薬、学業成就お守りなど至れり尽くせりの備えをしていました。「私にはこれくらいしかできないから…」と祈るように取材カメラに答える姿に、子を思う

偽らざる気持ちなのだろうなあとしみじみと感じ入りました。

私もかつて受験生でした。そして、私が私立高校の入試を受けた日にもかなりの大雪が降りました。会場まで父に車で送ってもらうことにしていたのですが、確実に渋滞が見込まれたことから、予定を早めて真っ暗なうちに出発し、何とか定刻に間に合ったのでした（確か、試験開始は結局定刻から2時間遅らされたんだっけ）。当時の私は、第一志望の学校でなかったこともあって、「ああ、雪だな」くらいに呑気に構えていました。そしてこのときのことはほとんど忘れてしまっていたのですが、何年も後になってから、父が「あの日は本当に焦った。大変だった。」というようなことを言っていて、親にとってはあれは一大事件だったのだなと気づいてハッとしました。

続いて大学受験。私は「Z会東大マスターコース」という予備校（Z会といえば通信教育が有名だが、当時仙台にはこういう名称の通えるZ会があった）に通っていました。授業は遅い日は夜10時近くまでかかり、授業が早く終る日も自習室が閉まる夜10時まで毎日勉強していました。

晴れて大学に合格し、お世話になった英語の先生に御礼の品を贈りました。すると先生から礼状が届き、そこには、「夜中にお母さんが迎えに来て待っている姿を思い出して涙が出てきました」と書いてありました。私はしばしば帰りに親に車で迎えに来てもらっていたのですが、礼状を頂いた当時は、「へえ、先生はそんなところに気づいてたんだな～」くらいに思っただけでした。

しかし今の私には、先生の抱いた感動がよく分かる気がするのです。そして、遅くに親が迎えに来てくれていたことにも、それを見守る先生の眼差しにも、かけがえのない温かさや美しさがあったとひしひしと感じるのです。あれから16年、受験勉強の中身は忘れてしまいましたが、予備校から遅く帰宅した私のために母が一人用の鍋で用意してくれたキムチ鍋なんてものは今でも思い出されるのです。

受験生時代、私は少しの息抜きもせずに勉強に専心していましたが、辛いとか苦しいとかいった記憶はありません。本当にありがたい環境にいたおかげだろうと思っています。

このように何年も経った後にしみじみと感謝される、そんな行いを私もしていきたいものです。以上、大雪とセンター試験のニュースから取りとめもなく昔を懐かしんでみました。

研修は終わりましたが、そのご縁でこうして書かせてもらってうれしく思います。2017年が麦の会、そしてコッペの皆さんに幸多き1年になりますよう祈っています。

新人

阿部央希

2017年4月3日(月曜日)から

新人が来ます。とてもいいめでたい

コップに入ってきてるとよかったです

思っています。初めていい仕事も

出来るし新人もうまくできるよ

これから本当に新人が入って

よかったです強く思っています。

おめでとう新人が初めて来る

ノーマライゼーション12月号

(日本障害者リハビリテーション協会発行)より転載

杜の都仙台のアンテナショップ 「エフブンノイチ」

コップのクッキーも販売しています。機会があればお立ちより下さい。

住所 青葉区中央 3-3-5 日乃出 620 駐車場精算所となり

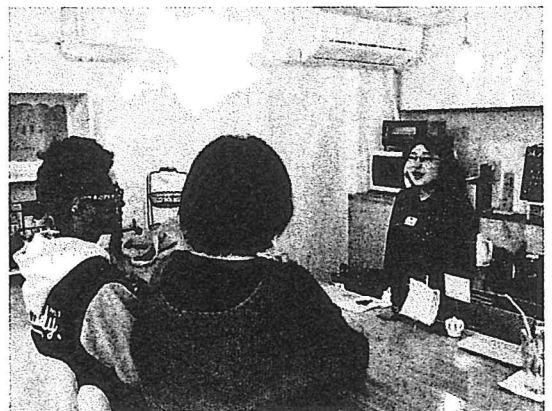
電話 022-395-8818 営業時間 11時～16時(土・日・祝日休み)

金澤恵利香、佐藤由美、森田久美子

オープンする経緯

杜の都仙台の街中に、たった5坪の小さな店舗がありました。そこは障害のある人たちが働く就労事業所(桑の木)でしたが、思うように客足が伸びず、常に苦戦していました。ビルのオーナーのご理解で、とても良い条件で賃貸することができていたので、何としてもこの場所で頑張りたいと考えていました。主に飲食店を運営している事業所なので、飲食店以外の新しいアイデアが浮かびませんでした。

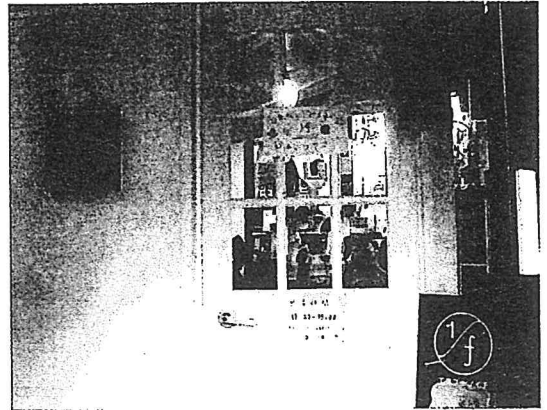
壁にぶつかり、身動きが取れない状況にいた時期に、たくさんの方々が集まって「商品はどう作り、どう売るか」の話聞く機会がありました。自分の法人や事業所だけではない、多くの事業所の商品を販売する店舗はできないだろうか?平成27年の秋に、「麦の会」理事長に考えを話してみたところ、あれよ、あれよという間に、当法人を含め5事業所が集まり、福祉事業所の「協働のアンテナショップ」として、工賃の向上と商品を多くの方



お客様と談笑するメンバーさん

運営することになりました。5つの事業所が集まり、店舗の名前やコンセプトを決めるので、何度も集まり、一つ一つ決めていきました。

店の名前はたくさん候補がある中で、自然界の揺らぎの音という意味を持つ「エフブンノイチ」に決め、福祉事業所のセレクトショップとしてオープンし、広く地域の皆さんや、買い物に来ている方々に来店していただけるようなお店にしました。協働でサポートするために、特定非営利活動法人仙台・みやぎNPOセンターの「みんな



お店の入口

んPresent'sまち・むすび助成金」に応募しました。審査員の前で、自分たちの思いを伝え、最後は自然界の揺らぎのダンスで締めました。その結果、助成金をいただけることになり、本格的に開店に向けて準備することになりました。「コッペ」「みどり工房若林」「アトリエソキウス」「みやぎセルフ」「桑の木」の5事業所が集まり、何度かプレオープンを行い、お客様の反応やアンケートによる感想をいただき平成28年5月16日に、60種類の商品を置く、県内初の福祉事業所の協働アン

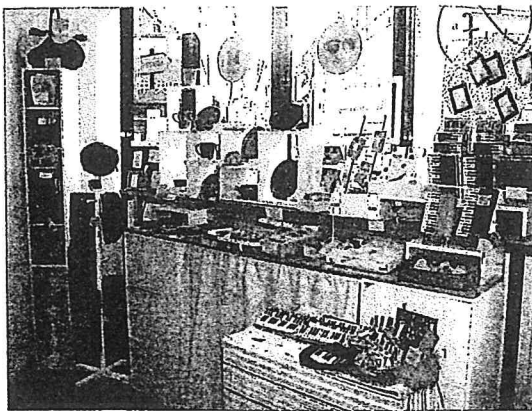
テナシヨップとして、晴れてオープンを迎えることができました。

現在の状況

エフブンノイチは、オープンして約半年が経ちました。その間、新聞やテレビ、情報誌などでお店を紹介していただいたこともあって、来店するお客様が増えました。特に、障がいのある方やその家族にとっては、仙台の中心街にできた、福祉事業所による雑貨&カフェということで、興味津々だったようです。実際に来店してみると、白を基調とした、柔らかい雰囲気の内見を見て「素敵だ」「おしゃれね」と言ってくれます。手作りの品の温かみも加わって、狭いながらも独特の空間を作り上げているのかもしれない。コーヒーを飲みに来るお客様で、週に2、3回いらつしやる常連さんも増えてきました。ある方は絵を描くことが趣味で、今描いている絵の進み具合を見せてくれたりします。当店だと周りに気を使わずに過ごせるとおっしゃる障がいのあるお客様、当店スタッフのお喋りを楽しみに来てくださる

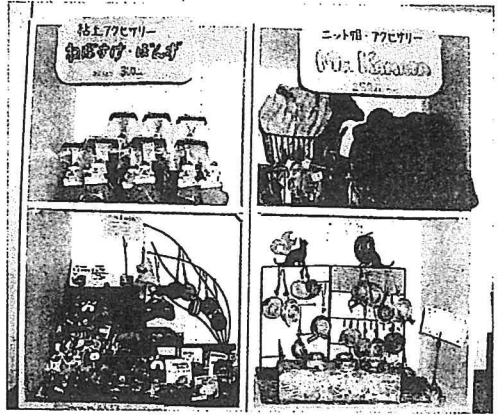
方などさまざまです。ある時は、居合わせたお客様同士で話が弾み、交流が生まれたりします。また、お客様が自分の関係するイベントのチラシを持参して、お店に置いてくださいと頼まれることもあります。

こうしてエフブンノイチは、お客様同士のつながりや情報交換の場として育ちつつあります。そして、今までイベント等でしか買えなかった商品が、ここに来れば購入することができるので喜ばれています。知り合いへのプレゼントとして、ピアノの鍵盤がモチー



店内の商品

レンタルボックス



ために当店を訪れます。それから、赤ちゃん連れのお客様が自分と子ども用にと、国産小麦使用のクッキーを買って帰ったりされます。

お客様には、障がいのある人たちが作った商品という意識は全くないようには思えません。「デザインが気に入ったから」「可愛いから」「色が優しい」と言って買ってくださいます。隣接する駐車場を利用する買い物帰りの方も気軽に立ち寄って、商品を手に取り「皆さん、器用に作るのね」と感心してご覧になります。また、エフブンノイチの店員は障がいのある人たちで、一般

のペンケースを何度も買いに来てくださる方、ネコ型と家の形をした箸置きを買い求め、それらを飾って眺めているという方は、その後もネコの家族を増やす

フのペンケースを何度も買いに来てくださる方、ネコ型と家の形をした箸置きを

目になります。お店を出す軽食は、まだまだ難しいけれど、少しずつできれ

「おいしいね」と言われてうれしいです。スタツフの森田さん、一緒に働くメンバーさんにも「珈琲淹れ上手だね」と言われました。慣れるまで少し時間がかかったけど、今は慣れてきました。これからも少しずつできる仕事を増やせるようにしたいです。お客様が、お店を気に入ってくれようれしいなと思っています。もつとたくさんのお客様が来てくれるように、もうひと頑張

働いてみて（佐藤由美）
私は、この仕事を始めて今年で6年目になります。お店を出す軽食は、まだまだ難しいけれど、少しずつできれ

張ります。

今後の展開

これからのエフブンノイチは、もっと幅広い層のお客様に来ていただくために、新商品の開発や、ワークシヨップ等の企画が不可欠かと思えます。そして、すでに開いているオンラインシヨップは、一つ一つの商品の使い方の提案もしつつ、全国展開していく方向です。

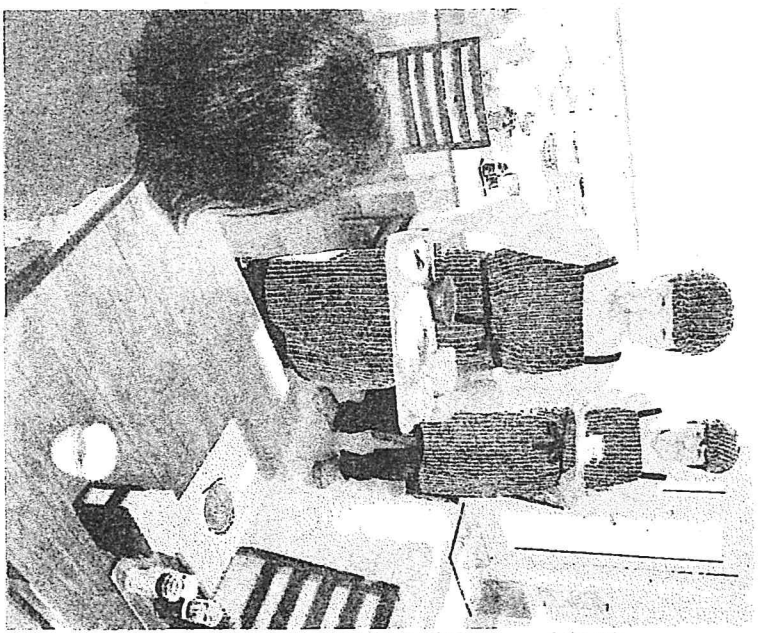
10月から、他の事業所の方や一般の方々にも、一定のスペースをお貸しして商品を販売してもらおうレンタルボックスを開始しました。さらに、障がいのある方の職場見学等としても活用いただけるようになっています。商品を売る、コーヒーを飲む、だけではなく、人と人との繋がり（なご）を大切に、心地良い空間を提供していただけるようなお店を目指しています。

（かなざわえりか NPO法人桑の木理事長、さとゆみ 「カフェクワノキ」メンバー、もりたくみこ エフブンノイチ店長）

地元食材おしゅれに提供

12/16
河元 471

仙台・四郎丸「田んぼがふるえ」オープン



ミニデザートを配膳する大友さん(左)と吉田さん

仙台太白区四郎丸に、地元産の野菜や米を提供する「田んぼがふるえ」がオープンした。コンセプトは「田んぼがふるえ」がオープンした。数地区で障害者の小規模作業所を運営するNPO法人「ルハクス」が、地域交流の場としてつとめた。3日のオープン以降、じわじわと利用が広がり交流がまわっている。

障害者を援NPO地域交流の場に

「ルハクス」は2002年に市南端の住居地にある。怒か市営の手配を始め、1日約10食を販売している。弁当や水田を産み、そこで採れた米と自家栽培の新鮮な野菜が売られている。ミニデザートにも提供している。ミニデザートにも提供している。ミニデザートにも提供している。

接客は障音のある大友さん(左)と吉田さん(右)が担当する。吉田さんは「最初は緊張したが、『おしゅれ』という言葉で、定休日は日曜、祝日。カレー、魚、肉の各メニューが70円、焼きそばは80円。弁当や総菜も販売している。友人を誘ってまた来た」と喜んだ。

41 1046